

〔翻 訳〕

ニューヨーク州死刑委員会報告書（抄訳）

永田憲史（解題・総監訳）
後藤貞人・正木幸博・
陳 愛・唐崎浩司・
水谷恭史（監訳）

【解題】

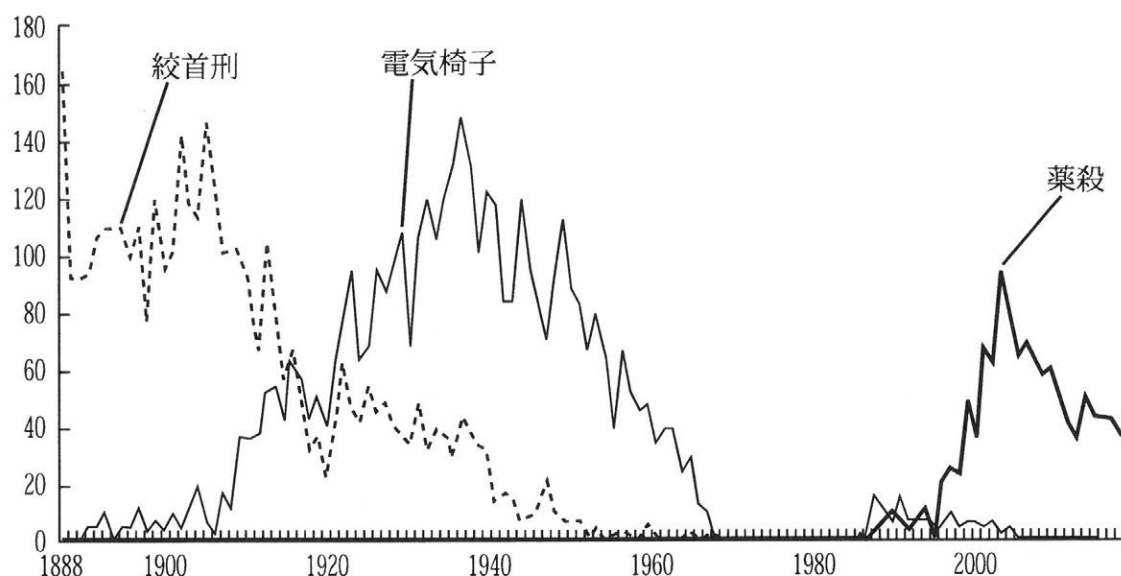
本報告書は、Elbridge T. Gerry, Alfred P. Southwick, Matthew Hale により構成されたニューヨーク州死刑委員会（New York Commission on Capital Punishment）によって1888年にニューヨーク州議会に提出されたものである。本報告書は、委員長の名をとって、「ゲリー報告書」又は「ゲリー委員会報告書」と呼ばれることがある。本報告書の正式名称は、『死刑事件における死刑判決の最も人道的で実用的な執行方法の調査及び報告のための委員会報告書 1888年1月17日ニューヨーク州議会へ提出（*Report of the Commission to Investigate and Report the Most Humane and Practical Method of Carrying into Effect the Sentence of Death in Capital Cases: Transmitted to the Legislature of New York, January 17, 1888*）』である。本報告書は、ニューヨーク州議会に提出された後、トロイプレス（The Troy Press）より刊行された。

本報告書は、正式名称の通り、死刑の執行方法について検討するものである。19世紀末葉、アメリカでは、死刑の執行方法として、絞首刑が全盛であった（図1参照）。こうした状況の下、ニューヨーク州死刑委員会は、「死刑事件における死刑判決の執行の現代科学によって知られている最も人道的で実用的な方法を早期に調査し報告する」ことを求められて1886年に立ち上げられた。

本報告書は、事実上重複する執行方法2種類を含む34種類の執行方法を比較検討し、絞首刑が最も人道的で実用的な執行方法か否か検証している。

具体的には、第一に、死刑に関する歴史を総覧している。この中で、絞首刑を含む従来の執行方法を34種類検討する。第二に、当時採用されていた執行方法及びその批判に

図1 アメリカの死刑執行方法の変遷¹⁾



1888-2002 は, Espy, M. W. and Smylka, J. O., *Executions in the U. S. 1608-2002: The Espy File* 2002- は, Death Penalty Infomation Center, *Execution Database* より作成

について論及する。第三に、絞首刑に対する批判を詳細に紹介し、分析する。第四に、憲法論に触れつつ、絞首刑とは異なる執行方法を採用すべきことを助言する。第五に、絞首刑の代替として電気椅子の導入を提案する。

これらの記述のうち、最も紙幅が割かれているのが第三の絞首刑に対する批判についてである。ここでは、① 執行の直前に被執行者に対して酒を与えること、② 被執行者が自殺を試みることによって生じる問題、③ 絞首台において生じる衝撃的な光景、④ 高齢者に対する執行の問題、⑤ 執行後の蘇生の可能性、⑥ 妊娠を含む女性に対する執行の問題に関して実例を多数挙げながら論じられている。とりわけ、③ 絞首台において生じる衝撃的な光景については、(1) 犯罪者の抵抗や苦痛、(2) 死刑執行人の技術不足又は残虐な無頓着、(3) 見物人の違法行為、(4) 高齢やその他被執行者の個人的な事情によって引き起こされる見物人の同情、(5) 1度に2人以上の執行を行う必要がある際の手続の混乱が詳細に紹介された上で分析されている。

本報告書においては、死刑執行が残虐に行われることが不当であるとされ、次のように論じられている。

1) ガス殺等の他の執行方法もあるが、絞首刑、電気椅子及び薬殺と比べて少ないため、図から省いている。

「生命の剥奪は、それ自体、あらゆる人間が被る最も深刻な損失である。偶然であっても、死の苦痛を大きくしたり、法の執行をより恐ろしいものにするような方法でその損失を増大させたりすることは、抑止効果があるとの議論に基づいてのみ正当化される。既に示した通り、それは長年にわたって試みられてきたが成功していない。」

「……犯罪者に余分の激しい肉体的な苦痛を受けさせて死の恐怖を増大させることは、時代の博愛精神のみならず、法の内容自体にも違背している。」

本報告書を受けて、ニューヨーク州は、死刑の執行方法を絞首刑から電気椅子へと改めた。その結果、1890年には、ウィリアム・フランシス・ケムラー（William Francis Kemmler）が電気椅子で初めて執行された。本報告書が出された後、アメリカでは、絞首刑から電気椅子、さらには薬殺へと主たる執行方法が変遷していったのである（図1参照）。

ニューヨーク州において死刑の執行方法が議論されるに至ったのには、電気会社の政治的な働きかけという特殊な事情があった²⁾。もっとも、他の州において死刑が廃止される中で絞首刑の問題性が意識されていたという背景があったことは否定できないだろう。具体的には、1846年にミシガン州で反逆罪以外の犯罪類型における死刑が廃止されたことを嚆矢として、1852年にはロードアイランド州、1853年にはウィスコンシン州、1887年にはメイン州で死刑が廃止されていたのである³⁾。この他にも、死刑がいったん廃止された後に再度復活した州もある⁴⁾。本報告書は130年近く前に作成されたものではあるものの、現在の我が国の死刑執行方法を議論するに当たって重要な文献であると言える。なぜなら、我が国では、今なお、絞首刑が唯一の執行方法であり、その執行方法の妥当性を検討すべき時期にある点で類似しているためである。

もっとも、本報告書は、アメリカにおいて電気椅子に代わって主流となった薬殺について検討していない。これは、当時、死刑執行方法として薬殺が用いられていなかった

2) 詳しい事情については、リチャード・モラン著、岩館葉子翻訳『処刑電流』（みすず書房、2004）参照。

3) メイン州では、1876年にいったん廃止された後、1883年に復活し、1887年に再度廃止された。ジャン＝マリ・カルバス著・吉原達也ほか訳『死刑制度の歴史〔新版〕』（白水社、2006）118頁。

4) アイオワ州では、1872年にいったん廃止された後、1878年に復活した。コロラド州では、1877年にいったん廃止された後、1901年に復活した。ジャン＝マリ・カルバス・前掲注(3)118頁。

ことからすれば、やむを得ないことであつたが、この点に留意する必要はあろう。

また、本報告書が記述する医学的な知見は、今日の医学水準からして不適切な箇所も少なくない⁵⁾。

とは言え、絞首刑の問題性を豊富な実例をもとに明らかにしているという学問的及び実務的な意義はそれでもなお失われず、絞首刑の執行に関する情報が乏しい我が国においては、なおその意義は色褪せていないと考えるべきである。死刑の執行方法に関して、「西暦2000年のアメリカ人は我々よりはるかに進歩しているだろうか」との本報告書の問いは、アメリカだけでなく、2015年に日本で暮らす我々についても妥当しよう。

本報告書は、これまで、日本においてその全文が紹介されたことはなかった。そこで、本報告書の重要性に鑑み、その大部分を占める絞首刑に関する箇所を全て翻訳することとした。

本報告書は、コーネル大学図書館デジタルコレクション (Cornell University Library Digital Collections) として復刻されている⁶⁾。

本報告書の翻訳は、ある事件の関係者らが行った作業をもとに、後藤貞人弁護士（後藤貞人法律事務所）、正木幸博弁護士（青翔法律事務所）、陳愛弁護士（後藤貞人法律事務所）、唐崎浩司弁護士（堺みなと法律事務所）、水谷恭史弁護士（しんゆう法律事務所）により構成された別の事件の弁護団が中心となって監修した。その翻訳を永田憲史が調整し、必要な修正及び訳語等の統一を行った。翻訳等の責任は永田憲史が負っている。

なお、原注はページごとに1番から番号が振られているが、翻訳時には翻訳部分の通

5) 絞首刑の被執行者が死に至る機序については、オーストリアのラブル (Rabl) 博士の研究が参考になる。ラブル博士は、「体重が頸部に作用した瞬間に人事不省に陥り、全く意識を失う。……最も苦痛のない安楽な死に方であるということは、法医学上の常識になっている」とする昭和27年(1952年)の古畑種基博士の鑑定(古畑鑑定)が誤りであることも指摘している。中川智正弁護団ほか編著『絞首刑は残虐な刑罰ではないのか?——新聞と法医学が語る真実——』(現代人文社, 2011) 参照。判例上もラブル博士による知見が是とされている。大阪地判平23年10月31日判例タイムズ1397号104頁, 大阪高判平25年7月31日公刊物未登載 (LEX/DB 文献番号25501589. <http://deathpenalty-trial.jp> にも掲載されている。2015年4月23日閲覧)。古畑鑑定は、向江瑋悦『死刑廃止論の研究』(法学書院, 1960) 424頁以下に全文が掲載されている。

6) New York Commission on Capital Punishment, *Report of the Commission to Investigate and Report the Most Humane and Practical Method of Carrying Into Effect the Sentence of Death in Capital Cases: Transmitted to the Legislature of New York, January 17, 1888* (Cornell University Library, 2013).

ニューヨーク州死刑委員会報告書（抄訳）

し番号とした。この関係で、同じ文献であるにもかかわらず、Id. と記述されずに書名等が繰り返し記載されている箇所があるものの、原注のまま表示することとした。

【翻訳】

ニューヨーク州

第17号

上院

1888年1月17日

死刑事件における死刑判決の最も人道的で実用的な執行方法の調査及び報告のための
委員会報告書

ニューヨーク州議会御中

「死刑事件における死刑判決の執行（execution）の現代科学によって知られている最も人道的で実用的な方法を早期に調査し報告するよう」（1886年法352号により、及び1887年法7号により期間を延長されて）任命された委員会は、謹んで報告申し上げます。

（省略）

法の歴史

（省略）

モーセの律法における死刑

（省略）

利用されてきた様々な死刑の方法

（省略）

（1.） 異端判決宣告式（*Auto da fe*）⁷⁾

（省略）

（2.） 棍棒による殴打（*beating with clubs*）

7) 訳注 スペインの異端審問所等によって死刑を宣告された者に対して公開で行われる火あぶりを言う。

(省略)

- (3.) 斬首 (*beheading: decapitation*)

(省略)

- (4.) カノン砲からの砲撃 (*blowing from cannon*)

(省略)

- (5.) 釜ゆで (*boiling*)

(省略)

- (6.) 車裂き (*breaking on the wheel*)

(省略)

- (7.) 火あぶり (*burning*)

(省略)

- (8.) 生き埋め (*burying alive*)

(省略)

- (9.) 磔 (*crucifixion*)

(省略)

- (10.) 十分の一刑 (*decimation*)

(省略)

- (11.) 股裂き (*dichotomy*)

(省略)

- (12.) 四肢裂き (*dismemberment*)

(省略)

- (13.) 溺死 (*drowning*)

(省略)

- (14.) 猛獣等へのさらし (*exposure to wild beasts, etc.*)

(省略)

(15.) 生きたままの皮剥ぎ (*flaying alive*)

(省略)

(16.) 鞭打ち (*flogging, Knout*)

(省略)

(17.) 鉄環絞首刑 (*garrote*)

(省略)

(18.) ギロチン (*guillotine*)

(省略)

(19.) 絞首刑 (*hanging*) —— 当委員会は、本報告書のこの箇所で、絞首刑の過程について生理学的な見地から簡単に説明することとし、特に同執行方法を対象とした批判を示すのは、本報告書の後の箇所に譲る。

よく知られているように、絞首刑は、現在および過去から現在に至るまでの長きにわたり、この州における死刑の執行方法として採用され続けてきた。方式が極めて単純である——犯罪者の首に縄をかけて木の枝から吊す——ことから、その起源が非常に古いことは間違いないであろう。絞首台が刑具として導入された時期についての記述はまちまちである。しかし、それはコンスタンティヌス帝が磔刑を廃止した直後のローマ領であったと考えられる。初期の絞首刑の方式は、木で出来た十字架の模造品——高い柱で、最上部で梁が突き出し、その端から絞縄 (*halter*) を吊り下げることができるもの——であったと思われる。15世紀に⁸⁾、柱の最上部に天秤の棹のように釣り合いを保った梁があり、その一方の端には絞縄、もう一方の端には大きな重りがぶら下がっている方式が使用された。絞縄が引き下げられて犯罪者の首に掛けられたときに、反対側の重りが同人を地面から持ち上げるというものであった。15世紀半ばから、いや、より早い時代から使われていたと歴史上言われてもいるが、イングランドでは、今もそう呼ばれているギャロウズ (*gallows*) やジビト (*gibbet*)⁹⁾ という絞首台が使用されており、そのごく通常の方式は、直立した2本の柱の最上部が大梁でつながれて、そこから絞縄が吊り下げられたものであった。古代には、絞首台を利用する際、犯罪者はその場所に荷車で運ばれ、絞縄が調整された後に荷車はその者を残して梁の下から離れ、同人は絞縄の長

8) 原注 Fosbrooke's Encyc. Antiq., 300.

9) ギャロウズとは異なり、「さらしものにする柱」という意味がある。

さが許す限り落下した。より時代が下ると、犯罪者を落下させる方法は以下の2つの方法のいずれかによって確実になった。1つは、犯罪者の体よりもはるかに重量のある重りを反対の側の絞縄の端に結び付け、重りを落とし、梁の滑車を介して同人の体を何フィートか引き上げる方法である。もう1つは、台の上に被執行者を立たせ、絞縄を調整し、最後に足場を外して絞縄の長さが許す限り同人の体を落下させる方法である。

絞首刑は、長年、イギリス領において特徴的な死刑の執行方法であり、そのため、ある著名な作家¹⁰⁾は、法に基づいた死刑の執行方法として絞首刑は厳しい批判を免れないと認める一方で、それでもなお、「イギリスで絞首刑が廃止されれば、同時に死刑も廃止されてしまうだろう」と慎重な意見を表明している。この国では、多くの批判が絞首刑に対してなされてきた。国民の大部分は、死刑そのものに対してぜひとも必要であるとして賛成する一方で、より好ましい死刑の執行方法について意見を形成する機会や手段がなく、しかも死刑の執行がしばしば繰り返されることに衝撃を受けているが、当委員会は、以下に引用するよく知られた論評¹¹⁾がこのような国民の大部分にあるごく通常の感情を正確に表現していると信じている。

「3名の卑劣な男たちが、我がエジプトの監獄で法の下に究極の刑罰を受けて数週間経った。公平かつ慎重な裁判の後で彼らは有罪となり、人々の間に普通にある正義感に従って執行された。しかし、このような死刑執行であっても、死刑を強力に唱道する人々の間にさえ、大きく矛盾する考えを投げかけることとなる。絞首台が骨董品として博物館に置かれ、集まってそれを見上げる見学者が絞首刑の使用をやめた彼らの先祖（そのときには我々も先祖となっているだろう）と同じように文明と高尚さを持っていた形跡のある人々が人類の倫理的な状況を改善するためになぜこんな器械を利用することができたのか不思議に思う時代が来るだろうかと我々は疑問を持ってしまう。現在の我々がヨーロッパの博物館に収集された古い拷問道具を調査したときに身震いするのと同じように、我々の子孫は完全に使用できる状態で使われていない絞首台の展示物に身震いするだろうか。西暦2000年のアメリカ人は我々よりもはるかに進歩しているだろうか。我々は思い切ってそうであることを望みたい」。

「一方、現在の我々の知性に照らして、我々は縛り首にする他に殺人者を扱うよ

10) 原注 Pike, 2 History of Crime, 578.

11) 原注 52 Harper's Magazine, 462.

りよい方法を知らないのだから、なぜ慈悲深い工夫をして、犯罪者が罪を償うことになるぞっとする行為とはあまり似ていない執行方法を考案してはいけないのだろうか。この進歩の時代に、絞首台がずっと停滞したまま、単なるからくりの類であり続けていることの意義はおそらく小さい。絞首台は、扱いにくく非効率的かつ非人間的な代物のままで、暗黒時代の空に初めてその不気味な骨組みがそびえ立ったときと同じである。もし我々がそれを使わなければならないのなら、せめて普通のリンゴの皮むき器と同じくらいの正確さをもって調整されることを我々に理解させて欲しい」。

絞首刑の生理学的な側面は、次のように記述されている¹²⁾。

「絞首刑による死の直接の原因は窒息であり、これは卒中を引き起こす¹³⁾。他の損傷、例えば血管や神経への圧迫、脊椎の骨折、歯突起の脱臼なども起こる。卒中は絞首刑の死因であると長らく考えられていた。しかし、現在、首の血管への圧迫は、卒中で認められる血量過多のうっ血をごく稀に脳に起こすにすぎないと認められている。ブロディー（Brodie）氏が行った実験によれば、神経によって維持された血圧は、ほんのときおりにしか死因にならないばかりか、より不都合なことに、絞首刑で起こる他の結果からの回復を助長するかもしれないとされている。現在、絞首刑で実際に発生して死因となる事態は、深い昏睡であることが知られていて、それは脳の圧迫により起こり、卒中の徴候を伴わず、回復しない場合には通常の病気の最期、いわゆる麻痺が起こる。フォデラ（Fodera）は、これを描写したいくつかの興味深い症例を収集した。ヴェプファー（Webfer）は縊死で生き残った男女各1例に言及している。女性は何も憶えておらず、男性は、絞縄を使用したときには何の苦痛もなく深い眠りに沈んだようだったと述べた。モルガーニ（Morgagni）も、同様な状況から回復した人物が、最初の衝撃は目に入った閃光で、次に同じような眠りに沈んだと彼に語ったと述べている。もう1つの事例がベイコン（Bacon）大法官の著作を典拠として述べられている。ある紳士が首を吊った者が果たして苦痛を感じるか否か確かめようと思い付き、実際に自分で実験した。彼は直ちに人事不省に陥り、もし友人が絞縄を切って彼を下ろすのが間に合わなけれ

12) 原注 Forsyth's Med. Juris., 245.

13) 訳注 この内容は、解題で指摘した通り、ラブル博士の研究によれば、誤りである。

ば、この出来事は悲劇に終わっていただろう。従って、死に先立って窒息が生じ、もし適切な時期に助けられなければ、死は確実だろうと思われる。絞首刑の2つ目の死因は救命することが不可能なものである。それは、圧迫に加えて、気管若しくは咽頭の裂傷、又は首の靱帯の断裂によって引き起こされる頸椎の脱臼ないし骨折などから成る。有名なルイス (Louis)¹⁴⁾ は数名の死刑執行人に対して、どのようにして犯罪者のうちの一部分が助かる一方で、残りの犯罪者は蘇生しないで死んだのかと尋ねた。死刑執行人は、後者の場合、縄の結び目を首の下に置き、次に犯罪者の足元からはしごを外すと同時に体を回転させることで、気管の裂傷や第2頸椎からの第1頸椎の脱臼を引き起こしたのだと答えた。この脱臼は主に体重のある者に起こるが、高所から絞縄の端につながって落ちた可能性がある場合、あるいは死を早めるために体重を増やす試みがなされた場合にも起こっている。この種の死は非常に暴力的なものでもあり、便や尿、ときには精液が放出される。そして脊椎が損傷した場合、生命の終焉の迅速さはその結果によって明確に説明されている。水中で死んだ者の死体を見たときに浮かぶ質問と同じような質問が死体がぶら下がっている時にも浮かぶ」。

ある造詣の深い医師は、この問題に関する注意深く科学的な考察をこのように寄稿している¹⁵⁾。

「体が落とされて放置された場合、(縄が引っ張られると撚りが戻る傾向があるため、死体が1, 2度回転するのを除けば) 動かない時期が通常あり、おそらく1分程度続く。目の前にまばゆい閃光がひらめき、重苦しい音楽と違わぬ鳴り響く音が耳に届き、足は尋常でなく重く感じられて下に引かれ、顔面は外頸静脈を締めつけられて紅潮し、舌もうっ血してしばしば飛び出している。脳自体は貧血を起こしている可能性がある。意識がどれくらい持続しているかは異なっているが、早期に途切れ (タルデュー Tardieu), そして中等度から高度の痙攣もしくは断末魔が (意識が抑制された直後に自動的に起こるものではあるが) 多くの場合存在する」。

絞縄——窒息の進行は、絞縄の位置と動きによって大きく左右される。仮に、うず

14) 訳注 後述のリンカン暗殺事件で処刑されたルイス・ペイン (Louis Payne) のことと思われる。

15) 原注 Med. Legal Papers, 2d ser. pp. 266-268 and 271.

巻き状の結び目の中を絞縄が自由に動いて、首の全周にわたって均等な圧がかかり、さらに、内頸静脈は頸動脈より深部に位置するものの、そこが頸動脈よりも圧迫されるならば、血流の停滞が起こり得る¹⁶⁾。徳利結び（*Clove-Hitch*）は、アベリー・コーネル（Avery-Cornell）の裁判で言及されたように、危急の際に向いていない。気管の裂傷は極めて稀である。プロット（Plot）医師は、ヘンリー 6 世（Henry VI）の治世¹⁷⁾にある程度頭角を現した人物だが、その部位の骨化によって生き残った例を記載している。結び目が耳の下に（つまり同じ側の頸動脈の上に）置かれたときに最も完全に締まるという一般に信じられている考え方は間違っている。喉仏の上の陥凹に結び目が来ると、それは首の前で作用点となり、固い脊柱の後ろで抵抗部もしくは支点となる。この結び目の位置であれば、フランスのマザス（Mazas）監獄で保管されている記録に現れているように、短い落下でこと足りる。同所で1870年より以前に自殺を遂げた261人の大部分は、発見されたときにつま先か膝が床に着いており、しゃがんでいた者は少なく、何人かは椅子の上に足を上げていた。これに関する説明は次の通りである。記録がはっきりしている143人のうち117人について喉仏の上の陥凹に結び目があり、23人について喉仏の反対側に、わずか3人について喉仏の下気管にあったが、耳の下には1人もなかった。解剖室の給仕係であったバーク（Burke）は、後ろから喉をつかんで絞める方法を知っていた。親指と親指を重ね上記の陥凹に当てるのである。猪首は死を遅くするというもう一つ別の認識も広まっている。確かに、多くの場合において、体力の不足や体格の衰えが死刑に処せられる者の肉体的な回復力よりも勝ることはほとんどなく、その結果、被執行者が荒々しく苦闘することが起こり得る。1831年にベドロロー（Bedloe）島¹⁸⁾で絞首されたギブス（Gibbs）は、リンカン暗殺の4人の陰謀者の1人ペイン（Payne）と同様に激しく苦しんだ。黒人のハンキー・ジョーンズ（Hanky Jones）は、当時通常の寿命を超えており、そのため動物的な持久力もなく、10フィート落下したというさらに有利な点があったにもかかわらず、同じくらい、あるいは、より激しく苦しんだ。

生存者の感覚——苦しみ of 正確な質がどのようなものなのか、どの程度の激しさのものなのかは、部分的な憶測にすぎない。フライシュマン（Fleishmann）は、自分自身

16) 訳注 頭部に血液を送る頸動脈よりも頭部から血液を出す内頸静脈が圧迫されると、頭部に血液が貯まるという趣旨である。

17) 訳注 1421年生まれ、1471年没。1422年～1461年、1470年～1471年在位。

18) 訳注 現在のリバティ島。

の経験した事例について、絞縄が締まることによるわずかな恐怖の後は意識があるうちに感じる恐怖はないと述べた。ある女性（フォール Faure）は、7分間宙吊りになった後で蘇生したものの、ぶら下がった瞬間から全ての感覚を失っていた。モンティニャック（Montaignac）は、テュレンヌ（Turenne）の取りなしで（首に絞縄が食い込んでいたものの）救われて、瞬間的に苦痛がなくなって発作の絶頂で鮮やかな光が全身に広がり至福をもたらしたと述べた（本例では脳の鬱血が直接の原因である）。先に意識がなくなってしまうと、繰り返される痙攣の苦悶は全て単なる反射でしかないだろう。

経験豊富な同医師は、1869年から1873年まで最近の65例の要約を以下のように記載している¹⁹⁾。

49例の平均時間は11分15秒。絞縄——誤って調整された可能性があるもの5例、長さの不足3例、長すぎたもの1例、絞縄の切断8例、再度の絞縄の切断1例。

苦しみとひきつけ——激しく持続的なもの23例、中等度14例、軽度で短時間18例、胸の挙上（感覚の持続を示す）8例。

骨折又は脱臼——著明6例、部分的4例、疑い7例、ニューヨーク州の方法ではなし。

(20.) 切腹 (*Hari Kari*²⁰⁾)

(省略)

(21.) 串刺し (*impalement*)

(省略)

(22.) 鋼鉄の処女 (*iron maiden*)

(省略)

(23.) 胸上への石積み (*Peine Forte et Dure*)

(省略)

(24.) 毒殺 (*poisoning*)

(省略)

(25.) 粉碎機による粉碎 (*pounding in mortar*)

(省略)

19) 原注 Id., p. 271.

20) 訳注 *Hara Kiri* の誤記であると考えられる。

- (26.) 落下刑 (*precipitation*)
(省略)
- (27.) 圧殺 (*pressing to death*)
(省略)
- (28.) 拷問台 (*rack*)
(省略)
- (29.) 打刑 (*running the gauntlet*)
(省略)
- (30.) 銃殺 (*shooting*)
(省略)
- (31.) 刺殺 (*stabbing*)
(省略)
- (32.) 投石 (*stoning*)
(省略)
- (33.) 窒息刑 (*strangling*)
(省略)
- (34.) 灰による窒息 (*suffocation*)
(省略)

文明化された国々における現在の執行方法

(省略)

現行の執行方法に対する批判

- 1. ギロチン
(省略)
- 2. 鉄環絞首刑
(省略)

3. 銃殺刑

(省略)

現行の絞首刑に対する批判

4. 当委員会は、次に、現行の絞首刑に対する主要な批判を示す。最初は、被執行者に対して執行の直前に酒を与えるために結果的に混乱が起こることに関してである。

執行の直前に被執行者に酒をほしきまま与えることが広く行われているのはよく知られている。監獄の規律は受刑者が一般的にアルコール飲料を飲むことができない程度には改善されてきたとはいえ、この禁止はまさに死に臨まんとする者のために今なお緩められている。例えば、ある無政府主義者の例を掲載した雑誌²¹⁾は、次のように述べている。執行の朝、シェリフ (sheriff) と郡の補助医師は部屋に入るや否や、何らかの酒が欲しいかどうか被執行者たちに尋ねた。パーソンズ (Parsons) とフィッシャー (Fischer) は断ったが、エンゲル (Engle) は、ポートワインが好みに合うと述べて、それを貰った。彼は2、3回それを口に運んだ。書きものを再開していたシュピーズ (Spies) は、ラインワインが欲しいとの希望を表明し、一番近くの酒場から持って来させて、それをちびちびと飲んだ。

執行において日常的に見受けられるこの異常な出来事について、さらに説明したり報告したりする必要があるはずがない。被執行者は何らかの酒を飲みたがるのが常であり、死刑執行人は喜んで応じる。被執行者が酒を飲んで朦朧となることを大目に見る理由の1つは、死にゆくことで受ける苦痛をより小さくすることを許す慈悲である。もう1つの理由は、酒の力を借りた被執行者が、近づいてくる厳しい試練に対して尋常ではない強さもしくは不屈の心を持ち得ることである。

これら2つの理由には反論が可能である。最初の理由については、もし執行に付随する苦痛が執行の重要な部分であるならば、犯罪者は法に従ってそれを受けているのであり、それを甘受するよう強制されるべきであると言っても支障はないだろう。もしその苦痛が重要でないならば、適切な麻薬や麻酔薬を与えられるべきである。いずれの場合も、受刑者を朦朧とさせる手段としてアルコールに頼ることは、この執行方法の欠点を示している。さらに、もしアルコールが被執行者を酔わせるまで与えられたならば、彼は酩酊することになる。酩酊はそれ自体が罪である。倫理的に見て、創造主の御許に

21) 原注 New York Times, November 12, 1887.

酔った男を送り込むのはひどく不適切であり、論ずるまでもなく明白である。このことは、いくつかの事例において、被執行者自身によって認識されていた。ディモンド (Dymond)²²⁾ は、アレン・メア (Allen Mair) の絞首刑について、執行直前の宗教儀式が終わった後で、「グラス 1 杯のワインが彼のために持って来られたが、彼はそれをきっぱりと断り、全能の神の御許に酔っ払って行きたいと明言した」と述べている。

酒を与えることで被執行者を力付けるかもしれないという、2 番目に述べた理由であるが、これは、おそらく、自殺を試みて血液が失われたために体力が危険なほど弱っているときなど、確定判決を執行するためにアルコールの使用で生命を保つ必要のある稀な例を除けば、正当なものとは認められない。その稀な場合であっても、アルコールの使用に訴えることが必要ならば、ある種の拡散性のアルコールの皮下注射がより迅速で望ましい。さらに、絞首刑に耐えるように力付けたり、勇気付けたりするという口実でアルコールを与えることは、まさに抵抗するように力付けたり勇気付けたりするようなものであって、被執行者が絞首台で暴れた多くの事例は、疑いなくその者にアルコールを与えた影響であると説明できる。最後に、酒が犯罪実行の要素であるとき、法はそれを刑の加重事由と捉えている。なぜ極刑を執行するのに付随するものとして、酩酊を容認したり、寛大に扱ったりするべきなのだろうか。

当委員会が次に提示する批判は、被執行者が自殺を試みて、その後に恐ろしい場面が引き続いて起こるという付随して生じる危険性である。

被執行者が喉を切って自殺しようとしても、知識の不足や体を切る瞬間のためらいから、頸静脈でなく気管だけを切るため、それはしばしば失敗する。このような例は決して稀ではなく、軟骨の損傷²³⁾ は落下に対する抵抗力を非常に弱め、そのため落下で頭と体が完全に切り離される可能性がある。もしそのようなぞっとする破局が起こらなかったとしても、やはり損傷のある死体の外見はしばしば極端に不気味で衝撃的である。そのため、何らかの他の方法で自らを傷付けることができるのであれば、それが行われるだろう。ジョン・C・コルト (John C. Colt) の有名な例では、彼は絞首刑のために決められた時刻の直前、1 人で過ごすわずかな時間の間に、自ら心臓を刺したのである。あるいは最近の例では、執行される無政府主義者が小さな爆弾を口の中に仕掛け、自らの頭を粉々にしようとした。もしこれらの者のどちらかが短時間でも生き残っていれば、絞首刑において衝撃的な場面が起こるのは自然の成り行きであっただろう。自殺

22) 原注 The Law on its Trial, p. 118.

23) 訳注 気管を傷付けることによって、気管の軟骨の損傷も同時に生じる。

の企図がその後の場面に恐怖を加えた4つの事例が言及されている。死を複雑なものにした傷が自殺目的ではなかった1例に触れることとしよう。

1733年4月25日水曜日のタイバーン (Tyburn)²⁴⁾でのウィリアム・ゴードン (William Gordon) の執行は好例である²⁵⁾。「判決を受けて、ゴードンは、礼儀正しく真面目に振る舞った。彼は、少しでも自由が与えられたならば、やや度が過ぎるほど仲間と一緒にいたが、それ以外は真に反省した様子であった。彼の誠実さを証明するものとして、1回目は最初に判決を受けたときに、2回目は執行される朝に同時に刑を受ける他の2人の被執行者と一緒のときに、秘跡を計2回受けていることが挙げられる。彼は永遠の命の証であるこの最期の聖餐を経てすぐ、階段を下りて自分の房へ連行されたところ、隠し持っていたカミソリで自分の喉を切った。2分後に、看守の1人が彼の後からやって来て、血まみれの彼を見つけた。看守は彼をプレスヤード (press-yard)²⁶⁾の小屋に運び出したところ、偶然2人の外科医が監獄内に居合わせたため、2人のうちの1人が彼の喉を縫合し、法に従って彼の死刑を執行できるよう、彼を回復させて生き延びさせた。ゴードンは自分が自殺しようとしたことは否定し、あまりに早く枷を付けられたのでそれを切って外そうとしたときに間違っただけだと述べた」。

チャールズ・スピーアー (Charles Spear) は、以下のように述べる²⁷⁾。「ボストンで、海賊が自殺を試みた後であっても、彼を執行したことを考えると、法律は残虐さの限界を知らない。彼は厳重に監視されていたものの、シェリフがしばらく目を離したために機会を得て、自殺を試みたようである。しかし、法は野蛮かつ厳格であったため、傷から血が流れ出て彼の命が消えかかっているのに、その生命はあくまでも法に仕える者によって奪われなければならなかった。彼は椅子に座らされ、絞首台の下に運ばれて、残虐に殺された」。

モワール (Moir) は、1864年9月10日にリーズ (Leeds) で執行されたジョセフ・マイヤーズ (Joseph Myers) とジェームズ・サージソン (James Sargisson) の執行で恐

24) 訳注 現在のロンドン郊外に位置しており、「タイバーンの木 (Tyburn Tree)」と呼ばれた絞首台があった。

25) 原注 Old Bailey Cases, vol. 4, p. 63.

26) 訳注 有罪又は無罪の答弁を行うよう被告人に重しを乗せて圧迫する裁判所の建物の外にある敷地である。圧迫する場所であることから press-yard と称されるようになった。

27) 原注 Capital Punishment, 11th ed. 1845.

ろしい場面が生じたと述べている²⁸⁾。マイヤーズは後に執行されることになる殺人を犯した後、喉を切って自殺しようとした。ある地方紙が報じるには、「執行の少し前にマイヤーズの喉の傷が注意を引き、看守の1人が小さな絆創膏をその上に貼った。不幸にもこれは十分ではなかった。執行の数日前に、マイヤーズは傷の状態についてそれとなく言って、自分は傷からも呼吸できるので『余分に1ヤード落として』もらわなければ死なないと話した。彼は話をした相手に実際に喉で呼吸できることを見せた。傷は喉の中央にあり、絞縄は必然的にその上に来るため、もしそこが絆創膏で保護されていなければ、恐ろしい事態が起こる差し迫った危険性があった。実際にあった出来事は、この危険性を除去する適切な対策が取られなかったことを示していた。落下によっても彼の体重のために首が脱臼することはなかったものの、その落下の衝撃は傷を引き裂いて広げるには十分に暴力的であって、恐ろしい場面が続いた。1度か2度動いた後、マイヤーズは明らかにもがくのをやめ、死刑執行人の注意が激しく暴れて苦しみで死ぬに死ねないでいるように見えるサーギソンに向けられた。しかし1分後、マイヤーズはまだ生きていて、絞縄の下で傷口で息をしていることが分かった。この恐ろしい出来事は、抗し難い恐怖の感情を引き起こした。外科医に相談した後、判決を最終的に執行するための手段が採られたものの、これは落下から20分以上過ぎて初めて達成された。その間ずっと体に感覚が残っていたか否かについて我々が言及することは不可能である。しかし、確かにその罪人はその間息をしていて、肺に空気が入るかすれた音が明瞭に聞こえたのである。最も幸いだったのは、落下した死体の前に幕があって、多くの群衆の目から完全に隠したことである。我々は、もし大衆が幕の裏側で起こったことを知ったならばどのような結果になっただろうと身震いする」。

法が裁判官に対して罪に比例していると思われる方法で犯罪者を罰する権限を与えていたスコットランドにおいて²⁹⁾、犯した罪が刑を加重される情状を多く伴っていたロス（Ross）という人物は、右手を切り落とされて、死ぬまで絞首され、それから死体を鎖でつながれて吊され、殺人に使われたナイフと一緒に切り落とされた右手が絞首台の上に添えられるという判決を受けた。法の下で判決が執行される日が来て、クレイグ（Craig）氏に腕をつかまれ、ロスは刑場に歩いて行った。群衆に感傷的な内容の声を掛けて、熱情と献身にあふれた祈りをしばらく捧げた後で絞縄が彼の首に掛けられ、絞縄のもう一方の端は絞首台の上に投げられて、4人の煙突掃除夫がそれを持った。そして

28) 原注 Capital Punishment, p. 141.

29) 原注 3 Jackson's Newgate Calendar, p. 279.

犯罪者は右手をブロックの上に置き、死刑執行人は刃物を2回振り下ろしてそれを切り落とした。その直後に煙突掃除夫が絞縄を引っ張ってロスを地面から持ち上げた。絞縄がきつく引かれるのを感じた時、彼は血まみれの腕を痙攣するように動かして自分の頬を叩いたが、その彼の様子はあまりにもむごたしく描写するのがはばかれる。死体は鎖につながれて絞首台から吊られ、切り落とされた右手がナイフで貫かれて頭上に置かれた。これは、1751年1月8日のエディンバラでの出来事である。

当委員会は絞首台で起こった様々な衝撃的な光景について多くの記述に遭遇してきた。教養のある人々や高潔な人々の間での絞首刑に対する根強く一般的な偏見は、必ずしも死刑そのものに関連しておらず、方法が絞首であるときに起こった出来事について公表する多数の記述によって助長されていることには疑いがない。そのような記述は何百と見つかるかもしれない。絞首刑が常に繊細な者の感情を悩ませ、野蛮な者を混乱させるものとなりがちであったいくつかの理由を示すために、当委員会は、ここでは限られた記述を選んで編集して提示することとし、その影響力は、後述のより人道的で非公開の死刑執行方法を採用することによって大きく減少するだろう。それらは、第1に犯罪者の抵抗や苦痛、第2に死刑執行人の技術不足ないし残虐な無頓着、第3に見物人の違法行為、第4に高齢やその他被執行者の個人的な事情によって引き起こされる見物人の同情、第5に1度に2人以上の執行を想定する必要がある際の手続の混乱である。犯罪者が女性であったり、最近の傷で醜かったり切られていたりする場合に人々に生じる悪い印象の事例は他に記載されている³⁰⁾。

経験からすると、最悪の印象は、執行が上手くいかなかった場合に生じる。例えば、死刑執行人が不手際によって犯罪者に少なくとも外形上不必要な苦痛を与えたときなどに作り出される。これは、どのような執行方法でも、例えばギロチンであっても起こり得る。これらの場合、当局への怒りが表明される。人々は、政府がどうしてそのような恐ろしい方法で不幸な男を拷問する権利を有するのか理解できず、その犯罪者に対する同情が広まって法に対する尊敬が失われてしまうことになる。

多くの例で、犯罪者の抵抗や苦痛が記述されている。ヒールド (Heald) とテリー (Terry) の執行について以下のように述べられている³¹⁾。「テリーを拘束することができず、5、6人の男性が精一杯努力して踏み板 (drop) へ引っ張って行って、無理やり首に絞縄を掛けることができただけだった。この間に彼は面覆い (cap) を引き裂い

30) 原注 Moir, Capital Pun., p. 138.

31) 原注 Jackson's Newgate Calendar, vol. 7, p. 88.

ており、その後、絞首台の床が落ちた瞬間にヒールドは人生を終えたが、テリーは絞首台（scaffold）の手すりに体を委ねて横材の角に片足を掛け、角の柱に腕で掴まって離さなかった。このひどい状況において、彼は死刑執行人に引き離されて顔に覆いをしないまま死に追いやられるまで、1分ほど粘ったのだが、そのような事情はヨークでの執行記録ではおそらく決して分からないものである」。

サミュエル・ミッチェル（Samuel Mitchell）の執行では³²⁾、彼は連行されて来られるのとはほぼ同時に絞首されたので、絞首台の踏み板の上に長くいることが許されなかった。踏み板が落ちた後、彼は、激しく痙攣をして苦しみ続けて2度回転した際にひどい苦痛を感じている様子を何回か見せることになった。

ボイントン（Boyington）の執行は以下のように記述されている³³⁾。「彼はしっかりとしたゆるぎない足取りで絞首台へ歩いた。法を司る者が彼の執行に着手して、絞縄（noose）を首にかけるまでは、彼の心は鋼のようにしっかりと元気であった。しかし、その瞬間に彼はすくんで、この上なくみじめな自暴自棄に陥った。これよりも突然かつ恐ろしい変わり身が目撃されたことはおそらくなかった。「助かる望みはないのか。俺は死ななければいけないのか」という質問には彼にとって思わしくない答えが返ってきた。彼の頬からは血の気が引き、青白い顔に絶望がひどい形相となって現れ、筆舌に尽くし難い恐ろしい光景が始まった。彼は絞首台の下から警備部隊の中を走って逃げた。しかし、すぐに身柄を確保された。その後、恐ろしい場面が続いたが、我々は法に基づいてなされる死刑執行において今後同じようなことが起こらないよう祈るほかない。犯罪者の絶望的な苦痛は、法の代理人が必要な職務を遂行することへの頑強な抵抗に示された。最後に絞縄から吊られた時でさえ、彼が死刑判決を受けた自らの生命に必死で執着していたことは、縛られた手を自由にして絞縄を握ろうともがいたことから分かる。彼は手を絞縄と喉の間に入れることに成功し、最期まで抵抗しあがき続け、絶望して死に、見た限りでは悔い改めることはなかった。裁判の間、そして死刑判決から執行のその時までの間、彼は人を寄せ付けないうずうずしさや向こう見ずで不謹慎な態度のために人目を引いたのと同様に、彼の人生の最後の5分間に見せた死への恐怖と意気消沈で注目された。

同じ著者は、ニューベリーポート（Newburyport）の建物に火を付けた罪で、わずか17歳のスティーブン・M・クラーク（Stephen M. Clarke）を執行する際に、兵士の行

32) 原注 Id., p. 192.

33) 原注 Spear's Capital Punishment, 11th ed., 1845.

列と軍歌の中で舎房から彼を出して絞首台へ連行することが必要であったと述べている。

ディモンド³⁴⁾は、1856年3月31日にウィリアム・ボスフィールド (William Bousfield) が絞首刑に処せられたときに、ニューゲイト (Newgate) で起こった恐ろしい情景について述べている。その不幸な犯罪者は、これ以下の状態は考えられないほど、倫理観がなく、判決を待つ間、彼は極端にむっつりして機嫌が悪かった。教誨師が彼の犯罪に言及するたび、「なあ、それは話さないでくれ。嫌な夢だ」と言うのが常であった。彼は宗教的な慰めを全て頑固に拒み通した。死刑執行 (月曜日) に先立つ土曜日に1人の看守と被執行者房で座っている間に、ボスフィールドはふいに前に突進して、火に頭をかざして顎を一番上の横棒に当てた。彼は引き離されたが、顔面がひどく傷付いた。その夜と日曜日の間中、炎症を抑えるための治療が施され、外見のひどさは軽くなった。しかし、彼は意に介さず、少しミルクとワインを飲んだ他は一切食物を拒否した。月曜日の朝、彼は消耗し切った状態であるように思えた。彼の顔は布で覆われたが、彼は座っていたため、いや正確に言えば、付添いが椅子の上に彼を支えていたため、見るも無惨な晒し者になった。彼に立つ気を起こさせることは不可能であった。そのため、2人の男が体を、2人が足を支えた。彼は絞首台の下に運ばれた。ここで彼は再び椅子に座り、そのままで踏み板のところまで運ばれたが、そこで彼はかがんで椅子に座り、最も救い難い恐怖と弱々しさを示す悲惨な見世物となった。ある人物がカルクラフト (Calcraft)³⁵⁾ に対して、職務を遂行するために現れれば銃で撃つと脅す手紙を送って脅迫していた。面覆いと絞縄を急いで装着して、カルクラフトは階段を駆け降り、ボルトを引いて³⁶⁾、姿を消した。被執行者の体は1秒か2秒の間吊られたまま動かなかった。立会いの職員が驚くような力でボスフィールドはゆっくりと体を持ち上げ、踏み板の右側に足を掛けた。看守の1人が急いで前進して、彼を突き離れた。あわれな人物は再度足掛かりを得ることに成功したが、今度は踏み板の左側であった。シェリフはぞっとしてカルクラフトを探し、やっとのことで教誨師が彼を戻らせた。彼はみじめで悲惨な男をもう一度押戻した。ボスフィールドは4回にわたって足掛かりを得ることに成功した。彼はまたもや突き飛ばされて、次にカルクラフトが吊り下がったボスフィールドの体の上に身を投げ出して、ついに全力で彼を絞め殺した。その間、群衆は非常に興奮した。叫び声や罵りの声が絞首台をとりまくぞっとするようなどよめきと一緒に起こった。

34) 原注 The Law on its Trial, p. 160.

35) 訳注 当時の死刑執行人。

36) 訳注 当時の英国の絞首台はボルトを引いて踏み板を落とした。

「恥を知れ」、「恥を知れ」、「人殺し」、「人殺し」という叫び声がイギリスの司法の代表者たちの耳に届いた。このような光景は監獄の壁で大衆の目から隠されるべきだと力説する者たちが見受けられることは全く不思議ではない。この絞首刑による死刑の制度は、ボスフィールドの執行における出来事が引き起こしたもののような、この制度に対する評価への打撃がさらにあれば、持ちこたえることができなかつただろう。

もう1つの深刻な批判的的は、死刑執行人の拙劣さや無頓着に起因する惨事である。スループ型戦闘艦パルティアン（Parthian）の船上でのジェイムズ・スミス（James Smith）の執行において³⁷⁾、1809年12月26日午前8時半頃、スミスは、殺人の罪によって憲兵隊長の監督の下で刑の執行を受けるために連れて来られた。9時15分に彼は絞首台に登ったが、そこに5分も留まることなく吊钩が発射された。何らかの事故もしくは絞縄を強く締める仕事をする者の不手際のために、巻いてあった絞縄が滑って、不幸な犯罪者は大変な速度で水際に落ちた。彼は再び引き上げられて、通常の時間吊られて、命の尽きた体が小船に下ろされた。

1855年4月30日のブラネリ（Buranelli）の死刑執行で³⁸⁾、絞縄の長さの調整が不適切であったため、彼の苦しみはまる5分間続いた。みじめな男はひどい痙攣を起こし、胸は持ち上がり、もがく様子が残虐なものであるのは明らかだった。群衆は憤慨し、野蛮な見世物に対して罵りの言葉を大声で叫んだ。しかし、彼は最後には死亡した。

アーノット（Arnot）³⁹⁾は、スコットランドの執行において死刑執行人が職務の遂行中に被執行者をぞっとするほど切りさいなんだため、彼は翌日に役所を解雇されたと記述している。

チャールズ・スピアー⁴⁰⁾は、2人の兄弟の悲惨な執行を次のように描写している。「ジェイムズ（James）はもがくことなく死んだ。しかし、書くのが憂鬱なことに、アレクサンダー（Alexander）が吊られた絞縄は切れて、彼は40フィート近い高さから通路に落ちた。彼は側頭部から自分の棺に落ちて棺が壊れ、何フィートか離れた場所にはね飛ばされた。彼は、（死んだと思われて）2人の監獄の職員によってすぐに運ばれた。死刑執行人も白い服を着ていて、その服の顔を覆う部分を黒く塗りつぶしていたが、はしごを使ってすぐに別のより強い絞縄を滑車に掛け、少し苦勞しながら再び踏み板を引

37) 原注 Jackson's Newgate Calendar, vol. 1, p. 84.

38) 原注 Dymond, The Law on its Trial, p. 194.

39) 原注 Scotch Criminal Trials, p. 138.

40) 原注 Capital Punishment, 11th ed. 1845, p. 47.

き上げ、その間に、そのときはまだ吊られていた不幸な犯罪者はできる限り端に押され、さらに少し遠くに下ろされた。彼が落下してから約20分後、集まっていた群衆が驚いたことに、アレクサンダーが再び現れ、以前よりしっかりとした足取りで踏み板へと歩き、教誨師の祈りの言葉に答えたのである。彼は決められた場所に立ち、合図があつて踏み板が再び落とされたものの、脇にどけられていたジェイムズの肩に引っ掛けて、アレクサンダーは死亡したもののすぐというわけにはいかなかったのである。板がゆっくりと落ちてきて、ジェイムズの遺体に沿って滑り落ちた。絞縄の結び目はアレクサンダーの顎の周りを回って動き、彼は数分間ひどく苦しんだ。彼の全身は痙攣した。窒息の間に彼は何度か足を壁にぶつけ、力を込めて押して体を壁から離した。彼の服ははだけて裸の胸が見え、面覆いも同じように顔から外れていて、落下したときに頬に出来た傷から血が流れ出ているのが見えた。見物人の感情は表現し難いが、非常に苦悩していた。ようやく手が下がり、体がだらりと伸びるのが見え、そして彼は兄⁴¹⁾の側にぶら下がつて動かなくなった。

ボヴィー (Bovee)⁴²⁾ は、1865年3月ダンハムに (Dunhum) の炭坑夫アトキンソン (Atkinson) の執行において、絞縄が切れて同人が生きたまま地面に落下したと記述している。打撲傷を負ったこの哀れな人物は、30分後に不幸にも再度絞首された。1856年8月には、スタッフォード (Stafford) で、またも炭坑夫の執行の絞縄が切れて被執行者が地面に落ち、再び絞首されなければならなかった。他にも似た光景は稀ではなかった。ボヴィーは、このような惨事は、執行が公開されて衆目の中で行われる場合と同様、非公開で行われる場合にも同じく起こりそうだと考えている。

ごく最近のこうした実例は、1888年1月7日にカリフォルニア州オークランド (Oakland) で起こったものであり、ネイサン・B・サットン (Nathan B. Sutton) という名の男性が殺人の罪で絞首刑に処せられた際のものである。それは、日刊紙⁴³⁾に次のように描写された。

「最期の言葉を述べた後、サットンは後ろに下がった。彼は腕や脚を縛られている間、全く感情を出さず、絞縄が掛けられるときも、『ネクタイを付けてくれ』と平然と言うほどだった。黒い面覆いが顔に掛けられて、12時16分に踏み板が落ちた。

41) 訳注 兄ではなく弟の可能性がある。

42) 原注 Christ and the Gallows, p. 213.

43) 原注 N. Y. World of January 8, 1888.

落下距離は5フィート近くで、その落下が大き過ぎたために、その男の首は絞縄によって切断され、その惨状は立会った者を刺激して顔を背けさせた。15分後に遺体は棺へと納められた」。

無思慮でしばしば残酷な見物人の振舞いは、彼らの立会いを制限することによって一部はなくなったものの、別の深刻な批判を招くこととなった。

刑場でガウ（Gow）という人物に対して、驚くべき出来事が起こった⁴⁴⁾。友人が彼の苦痛を見かねて、彼の足を強く引っ張ったために、絞縄が切れて彼が落下してしまったのである。しかし、彼はもう一度絞首台へ引き上げられ、遺体はテムズ川の土手に鎖で吊られた。

ハリエット・パーカー（Harriet Parker）の執行について、彼女の監獄での振舞いは、自己の罪に対してこれ以上ないほど懸命に自責の念を示したものだだったと記述されている⁴⁵⁾。教誨師は、——容易に欺かれるような人物ではなかったが——担当したどの事例よりも真面目で慎ましい懺悔であったと断言した。彼女の執行のときが来て、彼女は教誨師や出席者とともに賛美歌を歌い、誰もが心を動かされた。その後、彼女は秘跡を授けられたが、厳粛な儀式がどう見ても終わらないうちに、絞首刑執行人が彼女を吊らすために入ってきた。その作業に大人しく従った後で、彼女は絞首台へ向かい、一同はここでも賛美歌をともに歌った。しかし、野次馬が彼女の登場を遅らせた儀式に対していらだった。彼らは忌まわしい楽しみを渴望しており、被執行者が踏み板に続く扉に現れたとき、ひどい叫び声、金切り声、呪いの声が彼女の耳に襲いかかった。その悪魔のような群衆の姿と声は手に負えないもので、怯えた被執行者は気絶して立会人の腕に倒れ、前に運ばれて意識を失ったまま絞首された。

同じ著者は、毒殺の罪で有罪認定されたサラ・チェシャム（Sarah Chesham）の執行で、役人はチェシャムが絞首台に上がるよう説得するのに苦労したため、いくらかの遅れが生じたと報告している。彼女は引き連れられ、最後には半ば運ばれて、ともに苦難を味わう被執行者の横に並ばされた。死刑執行後、遺体がまだ吊られている間に、カルクラフトは何人かの監獄の看守と一緒に、群衆をかきわけてパブにやって来た。群衆は大声で喝采しながら彼の後に殺到し、各々がその死刑執行人と親しく言葉を交わそうとして互いに争うほどであった。群衆が少し散らばった後で、私は街へ戻り、彼らの行動

44) 原注 Jackson's Newgate Calender, vol. 2, p. 204.

45) 原注 Dymond, The Law on its trial, p. 142.

をホテルの窓から注視した。朝の重大な仕事が終わったために、その日は酒食に耽ることになるのは明らかだった。パブはどこも満員だった。わいせつな言葉があちこちから聞こえ、酒で彩られた日が高くなっていくころには、私はその土地の若い男女が酔っ払いたちの間で体を寄せ合っていたり、公道の側溝の中で転げ回っていたりするのさえ見た。

現在、我が国のどこであっても、死刑執行がなされたときに同じような光景が監獄の外で発生している。

しかし、絞首刑による死刑執行が不快なものになる最も心が痛む事例の1つは、高齢の犯罪者の場合である。絞首台でワインを飲むことを拒絶したアレン・メア⁴⁶⁾については既に述べたが、彼は1843年に84歳のときに絞首刑に処するとの判決を受けた。

裁判の後で刑の減免を得るための努力が町当局によって最大限になされ、大臣に対して請願が送られたものの、返ってきた回答は、「法は曲げられない」だった。そのときが近付くにつれて、彼は非常に落ち着きがなくなり、舎房を離れるとき、大いに動揺して激しく泣いた。彼は前もって自分では歩かないと決めて宣言していたため、彼はコートハウス (court house) へ連行する2人の男性にその身を支えられなければならなかった。通例の宗教儀式の間、彼はひどく涙を流して骨のような指を顔に押し当てると、その間から涙が流れ出すせいか、ときどき両手をねじり合わせて握りしめた。心の中で自分の死刑執行が近付いていることを考えるのに没頭していたので、彼は自分の周りで起こっている出来事にほとんど注意を払っていないように見えた。この場面で、赤と黒の布を縫い合わせた軽装のジャケットとズボンで、大きな黒いクレープの喪章の面覆いを付けた奇妙な服装の死刑執行人が部屋に入ってきたところ、それを見て、メアは後ろに飛びのき、興奮のあまり手足が全部痙攣しているように見えた。その後、死刑執行人は彼を縛るために前に進んだが、メアは尻込みして離れ、死刑執行人の接近を明らかに不安がった。両腕にロープが巻かれたときに、彼はロープが痛いと不平を言った。「ああ、痛くしねえでくれ」と彼は言った。「痛くしねえでくれ。年寄りなんだ。——何も暴れてねえだろ。絞首台じゃ、死に損ないにしねえで、あっさりとあの世にやってくれ」。少し手間取った後で、彼は縛られ、悲しみに満ちた行列ができ、彼は2人の看守にはさまれて絞首台へと連れ出された。コートハウスから出て、絞首台と大群衆が彼の目に入ってくると、彼は悲しそうにうめき声を漏らし、両手を挙げて、「ああ神様。あ

46) 原注 Dymond's The Law on its Trial, p. 118.

あ神様」と叫んだ。彼はすぐに踏み板に連行されたが、立ってられないと主張し、群衆に話すとの決心を前もって表明していたため、彼のために椅子が運ばれた。彼は、座ることによって力と心強さを得たように見え、彼は群衆に厳粛さと呪いの入り混じった話をした。その後に祈祷が行われた。死刑執行人が面覆いをこの高齢者の頭にかぶせ、絞縄を調整し、合図のハンカチを手に置いた。このとき、彼は踏み板の上の椅子に座っていて、面覆いは顔全体を覆うように引き下ろされていたが、彼は自分の裁判に関係した者全員への呪いをぶつぶつとつぶやき続けていた。そして、椅子を外すため、彼は椅子から立ち上がるように要求されたが、できないと答えて悲しげに泣き、「神様、お願いで——」と彼が声高に叫んでいる間に死のボルトが引き抜かれ、惨めな高齢者はひどいうめき声をあげて、永遠の世界へと旅立った。しばらくの間、彼はしっかりと縛られていなかった片手を挙げて首の後ろに当て、震えながら絞縄を握って助かろうと努力したが、絞縄を掴む力はすぐに抜け、しばらくの間激しくもがいた後、彼はこの世に存在しなくなった。

一度に複数の絞首による死刑の執行がある場合、その結果はしばしば恐ろしく身の毛もよだつもので、悲しく気が沈む場面の危険が増える。そのような例はまれではない。リンカン暗殺の陰謀を企てた者たちの死刑執行で、4人の中に1人女性が含まれていた。反乱を起こしたインディアンに関連した約25年前の放火と殺人の事件では、37人が同時に絞首された。これがこの方法で一度に執行された最大の人数であると言われている。最近一度に複数の絞首された例は昨年秋のシカゴで行われた無政府主義者たちの事例である。次の記事は、当時発行されたものである。準備の手續に言及した後で、話は始まる⁴⁷⁾。

「その後、カチッという音がして、ガタンという音が響き、たちまち4人の白人の頭が絞首台の高さに吊られた。パーソンズ (Parsons) の体はしばらく動かなかった。落下距離は約4フィート6インチで、頸髄への衝撃が動きを止めた。その後、異様な身もだえが不意に起こり、無政府主義者の小柄な体が絞縄の先でひどくゆれ動いた。彼の首は折れておらず、窒息による死の恐怖が迫った。死装束の折り目は苦しそうにうねって捻れ、空気を得ようとする無意識の肺の努力で、彼の胸が上下するにつれて、参観者は無感覚ではいられなくなり、受刑者の死の苦しみに同情した。痙攣は数分間続いた。それが突然止まった。全てが静かになり、パーソン

47) 原注 N. Y. Herald, Nov. 12, 1887.

ズの魂は、その場から、『人間性』が森羅万象の至高の存在であるのか否かという問題を調査するために旅立った」。

「エングルの落下は、太くて短くがっしりした首を骨折させたに違いない。落下したとき、重い体は絞縄をひどく酷使したが、シェリフは賢明にも強度のテストをすでに実施していた。医師たちは、彼の首は折れていなかったものの、迅速な死であったことは脊髄への衝撃から確実であると報告した。事実がどうであれ、彼の体が宙を舞うのが止まったとき、彼は他の者より苦しまなかったことは確実である」。

「フィッシャーは何秒かだらりとぶら下がり、次に弱い痙攣の震えが少しあったために顔の白い面覆いが一部外れた。私は無政府主義者の口をちらりと見ることができたが、恐ろしい光景がそこにあった。舌は飛び出してくいしばった歯の間にあった。顔の下の部分に紫色の陰ができていて、窒息による死の苦痛の恐怖が明らかだった。手首の脈を親指と他の指で採っていた医師の1人が、慈悲深くも死体を回して忌しい様子を隠した。フィッシャーの指は何度か強い力で握られ、その後に全ての動きが止まり、だらりとした手に血があふれた」。

「シュピーズの体は絞縄の先で身の毛がよだつほど捻れた。このニーナ・ヴァン・ザント (Nina Van Zandt) の恋人の絞首台でのダンスによって、その中で刑死者の断末魔は『キルメイナムのメヌエット (Kilmainham minuet)』と呼ばれている、アイルランドの古詩にあるダブリン監獄 (jail) における絞首刑の場面の描写が思い起こされた。彼の頭はまるで助けを哀願するかのように床の上の人々に向かって揺れた。苦悶は、参観者がもう見るのをやめようと考え始めるほどで、最後に体が伸び切ってしまうまでどんどん激しくなった。人による復讐という限りにおいては、殺された警官たちの魂は慰められた」。

この問題についての次の検討課題は、蘇生が試みられる可能性である。

当委員会に託された調査の有用性に疑問を呈したあるジャーナリストは、絞首刑を執行された者が蘇生するあらゆる可能性を否定し、あくまでもこの執行方法に固執することに賛成して、未だかつて誰も絞首台で生き延びた者はいないという信念を主張した。当委員会は、そのような蘇生が起こり得るか、あるいは、かつて実際に起こったかについて探究することを有益と考えたことはない。法の番人と被執行者の間の悪質な共謀によって、そのような蘇生が可能であり、いくつかの例ですでに実際に起きているという信念が無学な人々の間に広くあると言われている。当委員会は、そのような根拠がない

信念は、刑罰の運用に疑念をもたらすため、十分に払拭されるべきものであると主張する。絞首刑からの蘇生が生じていないにもかかわらず、多くの人々がそれをあり得ることだと考えていると述べる裏付けとして、以下のような言説が、よく知られた法の権威⁴⁸⁾によってなされている。

チューブを挿入したり、絞縄が通常掛けられる部位より下の気道を切開したりして、法に基づく刑罰を受けるよう宣告された犯罪者の生命を維持しようとする企てが何回か実行されたが成功しなかった。もし首が折れなかったり、あるいは体重が極端に重くなかったりしたならば、この試みは多分成功していただろう。リチャードソン (Richardson) 教授は、オーストリア軍のある立派な外科医から、犯罪者の執行の直前に喉頭除去の手術を行ってその命を救ったと知らされたと述べている。同様の試みが、前世紀の初めにオールド・ベイリー (Old Bailey) で執行された肉屋のゴードン (Gordon) という人物に対して行われた。体は通常と同じ時間吊り下げられた後に、近くの家に移され、そこで待機していた外科医が同人を受け取って、生気を取り戻させるためのあらゆる手段を講じた。彼は目を開け、息を漏らしたものの、間もなく亡くなった。成功のために障害となったものは彼の重い体重であるとされた。

同じ著者⁴⁹⁾ は、事故もしくは犯罪や自殺の結果、縊首の状態で見つされた者について話したとき、そのような場合には次のような治療を引き続き施すように助言した。溺れた者を回復させるのに推奨されるのと同じ方法がここでも必要であって、さらに頸静脈の開通又は頸部への血吸い玉⁵⁰⁾の使用を追加するが、これらは頭部に貯留する血液の量を減少させ、それにより脳にかかる圧力を除くことによって蘇生を促進するのに相当有用である。この方法で取り除かれるべき血液は、多血症の体質の者でなければ、通常のティーカップ一杯を超えることは稀であり、この量は、一般的に生命力を弱らせることなく、頭部の血管の負荷を軽くするのに十分であることが分かるだろう。

人気のある雑誌の1つが、蘇生が起こったのではないかとの疑念を人々に振りまいてきた数多くの伝説を述べている。

絞縄 (collar) によって絞首する刑罰が、個人の首の異常又は絞首刑執行人の機転が利かなかったことによって失敗した多くの記録が残されている。古い記録が信用できるのならば、6世紀以上前にユタ・ド・バルシャム (Juetta de Balsham) が盗賊を匿った

48) 原注 Forsyth's Medical Jurisprudence, p. 252.

49) 原注 Forsyth's Medical Jurisprudence, p. 255.

50) 訳注 放血に用いる。

罪で死刑を宣告された。彼女は3日間吊られたが、生き返り、絞首台を何らかの方法で打ち負かした奇跡の人物として刑を免除された。

あるスイス人が13回くり返し絞首されたが、窒息を妨げる気道の異常のために全て失敗したという話は、オックスフォードのニューカレッジの学寮長オバデア・ウォーカー (Obadiah Walker) の書いた文献が出典である。我々は13回目が成功したのか否か、あるいは司法が最後は慈悲深かったのか否か述べる材料を有していない。

アン・グリーン (Ann Green) は、1650年にオックスフォードで幼児殺しの罪によって絞首刑を執行された。当時、ときおり行われていた野蛮な習慣に従って、念には念を入れて彼女の脚は引っ張られ、体は兵士の銃で突かれた。それにもかかわらず、絞首後かなりの時間が経った後で彼女は蘇生したのである。彼女の体は解剖に供された。外科医がかすかな生命の徴候を発見し、彼女を解剖する代わりに治療したので、13時間後に彼女は話すことができるようになった。彼女は何が起ったか全く覚えておらず、自分は深い眠りについていたと思ったようだった。国王は彼女に恩赦を与えた。彼女は結婚し、家族の中で母となったのだが、夫はおそらく稀に見るエピソードが彼女にもたらしたある種の名声に免じて彼女の過去の人生の過ちを許したのかもしれない。他の例は、多かれ少なかれ類似したものであり、以下のように語られている。

氏名不詳の女性が1808年に絞首刑に処せられた。彼女は規定された時間吊された後で、徐々にではなく、突然意識を取り戻した。

ジョン・グリーン (John Green) は、アン・グリーンのそれと少し似た苦しい体験をした。タイバーンで絞首された後、彼の体は著名な外科医であるウィリアム・ブリザード (William Blizard) 卿のところへ運ばれ、解剖室の台に乗せられている間に彼は生命の徴候を示し、実際に回復した。

オックスフォードのコープ (Cope) 夫人の女性の召使いがある犯罪で有罪となり、1650年に執行された。異例なほど長い時間吊られた後、彼女は絞縄から切り離されて、どさりと地面に落ちた。衝撃で彼女は蘇ったが、この不幸で哀れな人物は翌日に今度は間違いなく絞首刑を執行された。

1世紀半前のマーガレット・ディクソン (Margaret Dickson) は出産を隠蔽した罪で有罪となり、法による究極の刑罰を受けた。彼女の体は、エディンバラの絞首台で吊られた後で絞縄から切り離され、その友人に引渡された。彼らはそれを棺に納め、馬車でマッスルバーラ (Musselburg) まで6マイル運んだ。奉公人たちが荒々しく馬車を停め、棺の蓋がゆるんだ。これで空気が入り、その空気と揺れが相まって彼女を蘇生させ

た。彼女は生きて屋内に運ばれたが、かろうじてわずかに意識があるだけだった。牧師が彼女のために祈りに来て、彼女は最終的に回復した。いくつかの出来事は、死刑執行人と被執行者の間の馴れ合いがあったことを示しているようにも思われるものの、この話の中にはそのことがあったという言及まではない。マーガレットは長生きし、さらに子どもたちを産み、彼女が塩を売って暮らしたエディンバラでは、「絞首台から生還したマギー」としてよく知られた。

最後に述べた事例は、以下のように後に裏付けられた⁵¹⁾。

幼児殺しで有罪となったマーガレット・ディクソンの執行について以下のように記述されている。「執行の後、体は絞縄から切り離されて、彼女の友人に引渡され、彼らはそれを棺に入れて、出生地に埋葬するために馬車で送り出した。しかし、天気が蒸し暑かったため、棺を預けられた者たちはエディンバラから2マイルのペッパー・ミル (Pepper-mill) と呼ばれる村で一杯やるために止まった。彼らが休息している間に、彼らのうちの1人が、棺の蓋が動いて、死んだはずの女性が蓋を開けて直ちに起きあがったのに気付いたため、見た者のほとんどがふるえ上がって逃げ出した。そのときたまたまパブで飲んでいたある人物が、落ちていて彼女から放血し⁵²⁾、1時間ほど彼女はベッドに寝かされて、翌朝までには自分で家に歩いていけるまでに回復した」。スコットランド法は部分的にローマ法に由来しており、それによれば、裁判所の判決が執行された者は、その後さらに受刑させられることはなく、その時点から完全に免責される。同様に、婚姻は有罪判決を受けた当事者の執行によって解消されるとされ、実際、これはこのような場合における常識に照らした考え方と一致していた。上述のようにディクソンは有罪判決を受けて執行されたので、国王の法律顧問はそれ以上彼女を訴追することができなかったが、同人は法の遂行を怠った罪でシェリフに対する起訴状を高等法院に提出した。この生き返った犯罪者の夫は、彼女が絞首された数日後に公然と彼女と結婚し、彼女は嫌疑をかけられた犯罪について有罪であったことを一貫して否定した。彼女は1753年まで生きた。この稀な処置は1728年に行われた。

オーガスト・シュピーズ (August Spies) の最近の執行に関するこの種の話は、日刊紙のいくつかによって流布された。それは以下のように否定された⁵³⁾。

51) 原注 Jackson's Newgate Calendar, vol. 2, p. 155.

52) 訳注 前述の通り、放血は窒息の治療になると考えられていた。

53) 原注 New York Tribune of November 23, 1887.

「オーガスト・シュピーズの遺体を彼の執行後に蘇らせようとする努力がなされたという趣旨の話が流布されたものの、その話はその遺体が友人に渡された後に検死して完全に死亡していると宣告したジョージ・ティロ (George Thilo) 医師によってきっぱりと否定されている。本日の午後、ティロ医師は次のように述べた。

『遺体が最初にミューラー葬儀社に運ばれたとき、立会った人々の何人かが死体の異常な温かさを感じたと考え、私が呼ばれた。私は注意深く検死を行い、死が明らかであり、直流電池や他のいかなる手段でも蘇生の試みは無駄であろうとすぐに確信し、その旨をその場にいた者たちに伝えた。生命を回復させる試みを一切行っていない』。絞首刑に処せられて、救命された者の事例で医学的に認められているものは1例を除いて他にない。それは、数年前にオーストリアで起こった。その犯罪者は15分間吊られて、絞縄が切り離されたとき、実験のために医師に渡された。彼が絞縄から切り離された後5分以内、つまり踏み板が落ちて20分以内に遺体は解剖台の上に置かれ、強力な直流電流を流された。首は折れておらず、人為的に呼吸を作り出す多大な努力の後に、電気が持続的に使用されて、被験者は蘇生したが、荒々しい錯乱状態だった。彼はその状態以上に回復することはなく、24時間のうちに死んだ。さて、この事例においては回復させる薬品が絞首の後20分以内に使用されたのに対し、シュピーズの事例においては遺体が葬儀社に運ばれるまでに3時間経過していた』。

以下は、よく知られたジャーナリストから当委員会の委員長が受けとった私信の抜粋である。

「この街には、ニュージャージー義勇軍歩兵中隊の一員として戦争に従軍し、また、『シャーマンズ・バマーズ (Sherman's Bummers)』⁵⁴⁾の一員として活動して、ジョージア州での略奪遠征中に他の6人とともにシェルビー (Shelby) のゲリラに捕まって、木に吊された男性がいる。発見された時、7人全員が意識がなく、顔はどす黒かった。全員が絞縄から切り離されて、手が尽くされたにもかかわらず1人だけが救命され、その人物は今日この街で生きている。この出来事を目撃して話の通り真実であると証言する何人かの彼の戦友がいる。 * * * それによれば、絞縄が外れたため、彼は即座に窒息することはなく、彼の苦痛を長引

54) 訳注 南北戦争で北軍のシャーマン少将指揮下の軍で、食料などを略奪して調達した部隊を言う。

かせたものの、おそらくそれが彼の命を助けたのだろう。彼の喉にはまだ結び目のできたこぶがまだ残っており、それは20年前のものである。首への負荷が彼の片方の視力を完全に奪った」。

ところで、女性の執行に絞首台を使用することに対し、より深刻な反対がある。

女性に死刑を科すことに対する一般人の心の中にある重大かつ根深い反対について長々と説明する必要はない。この反対は非常に強くかつ広く流布されているため、無罪の評決や、毒殺で訴追された女性が第2級殺人罪と認定されるに留まったそれほど前ではないコネティカット州の例のように、訴追されたよりもより軽い犯罪の評決を保証することもしばしばある。それは免罪する適切な理由がない場合にも免罪をもたらす。それは不適當な犠牲を命ずる法律への敵意を長年煽り、存続させてきた。当委員会は、女性に対する死刑への公衆の反対は、理性的に分析すれば、その刑罰を科すことそれ自体に対する重大な反対ではなく、執行方法としての絞首刑において通常起こる不快な出来事が女性に対しても当てはまると想像される場合に、野蛮さや非人間性の増大、精神的な衝撃が高まることへの嫌悪であると認められると考えている。仮に、死刑が非公開かつ瞬間的な方法で行われるようになれば、事故や不手際がその場面を悪化させたときであっても、その執行方法は同情を求める実りのない訴えや苦しみ、介在する不快な出来事とは無縁であろう。もし、特に妊娠中の子どもを母の死の巻き添えにする惨事を避ける十分な手段が取られるならば、この特有の反対への熱意は減少すると確実に期待できるかもしれない。多くの人が共有する反対が提起されているのは、女性の執行に対してではなくて、むしろ女性の絞首刑に対してである。この反対が過去においてどれほど根拠が十分であったかは、当委員会のどれほど長い記述よりも、実在する膨大な数の記事のうちのいくつかを根拠とする方がよりよく理解されるだろう。

夫を殺したことで有罪となったキャサリン・ヘイズ（Catherine Hayes）の執行についての記事⁵⁵⁾によると、軽反逆罪（petit treason）⁵⁶⁾で女性が火あぶりにされる場合、女性の首にかけた絞縄を死刑執行人が引っ張って窒息死させることが慣例であった。これにより、女性は、火が体に達する前に死に至ることとなった。しかし、この女性は文字通り生きたまま火あぶりにされた。というのは、死刑執行人がいつもより早く絞縄を放してしまって、火が激しく彼女の周りで燃えたからであり、彼女の泣き叫ぶ声と悲嘆

55) 原注 Jackson's Newgate Calendar, vol. 2, p. 124.

56) 訳注 ここでは、夫の殺害を指す。

の言葉が空気を切り裂いている間に、見物人は彼女がまき束を押して自分から離すのを見ることとなった。別のまき束が彼女に投げられたが、彼女は炎の中でかなりの時間生き延び、彼女の体は3時間経っても完全には灰にならなかった。彼女のこの稀に見る死に方は、彼女の人生がそうであったように、人々の話の種となった。この件に関して多くの手紙が新聞に載った。彼女の犯罪とともに衝撃的な加重情状があったために、権力者が秘密の命令を下した結果、このような執行が行われたと主張する人々がいた。一方、シェリフが法はこのように厳格に執行されるべきだと命じたと主張する人々もいた。しかし、また別の人々は、これらはどちらも事実ではなく、炎が死刑執行人の手に届いたために、彼が自分の身の安全を守ろうと絞縄を放さざるを得なかったと主張したのだが、実際、これが最も可能性が高そうな意見であった。

著名な論者は次のように述べる⁵⁷⁾。「女性の執行は長い間、内務省 (home office) にとって大きな難題の源で、これは幼児殺しで有罪認定がなされる場合にとりわけそうだった。公衆の心情が女性の執行を特別な恐怖や忌まわしいものと見る理由について、多くの原因が読者には思い浮かぶだろう。この抵抗感は、幼児殺しが争いなく認められる事案において、公判中でも、もし稀ではあるものの死刑判決がなされるようなことがあれば判決後でも、死刑の適用に対して示された」。

加えて、彼は、2人の若くて弱い人間の執行は、等しく苦しみ満ちた状況を伴うものであろうし、同じ監獄でそのような出来事が起こることに対して、忌まわしい気持ちをいつまでも抱かせ続けただけであろうと示唆している⁵⁸⁾。

そのような2人のうちの1人であるマリー・ギャロップ (Mary Gallop) の執行について⁵⁹⁾、彼女は、収容されていた郡の監獄から絞首台が組み上げられる街の監獄に執行の前夜に移されたと言われている。事が近づくにつれて失神発作が起こり、絞首台の光景は何よりも苦痛に満ちたものになるであろうことが明らかになった。そして、実際にその通りとなった。彼女は踏み板まで意識を失って運ばれ、かくして、彼女は、イギリス法の正統な尊厳についての壮大な実演を見守るために集まった何千もの目の前で窒息死した。

2人のうちのもう1人であるマーサ・ブラウニング (Martha Browning) の執行について、次のように言及されている⁶⁰⁾。「絞首台での光景は、見世物を楽しむために来た

57) 原注 Dymond, *The Law on its Trial*, p. 97.

58) 原注 Dymond, *The Law on its Trial*, p. 132.

59) 原注 *Id.*, p. 138.

60) 原注 *Id.*, p. 139.

下劣な群衆にさえ嫌悪を催させた。絞首刑執行人は彼女の顔を覆う面覆いを取り換えるために、彼女の頭から犯罪者の帽子を乱暴に引き剥がして地面に投げ捨てた。その後、彼が絞縄を調整する際に、彼女の喉を下手な手付きで長々とまさぐっているように見えた。そして、どうやら何か不手際があつて、その気の毒な少女の窒息は、踏み板が落ちた後、丸々10分間続いたために、その間に群衆は野蛮な見世物への非難を怒り狂って叫んだ」。

さらに、サラ・ハリエット・トーマス（Sarah Harriet Thomas）の執行について、記事は以下のように述べている⁶¹⁾。「彼女が執行される時刻になった時、彼女を絞首台に連行するために、監獄の所長が舎房に入った。彼女は、移動することを拒否した。忠告や実力行使するとの脅しは無駄だった。ついに、所長は6人の看守に彼女を運び出すように命じた。その後、恐ろしい光景が続いた。がっしりした6人の男に対して、不運な被執行者は抵抗したものの、無意味だった。しかし、彼女の悲鳴が監獄中に響きわたった——『行きたくない。行きたくない』。彼女はプレスヤードに引きずり出された。絞首刑執行人は彼女を縛り、彼女はそれまでよりも冷静になった。所長が少し宥める言葉をかけて彼女を踏み板へと続く梯子の下へと静かに歩かせた。その後、彼女は再び抵抗した。2人の看守が彼女を梯子の上へ運び上げると、彼女のぞっとするような叫び声が外にいた人々の耳に届いた。『ああ、やめて。やめて』と彼女は叫び、縛られた手で死刑執行人を掴んだ。彼は心が動いた。というのは、彼は絞首刑執行人であったが、子どもの父親でもあり、彼が言うことには、『自分の娘たちのことを思い浮かべてしまったため』である。彼はこの怯えた女性を落ち着かせようとした。——『わかった、わかった、かわいそうな子だ、何もしないからね』。その上で、彼は素早く絞縄を調整して、『神の慈悲が私にありますように』と大きな声を上げるよう命じた。彼女が全能の慈悲深い神の名を口にしたとき、彼は彼女をこの世の慈悲から永遠に切り離した」。

1849年12月3日、アッペンツェル（Appenzell）での女性殺人者の執行で恐ろしい光景が見受けられた⁶²⁾。彼女は監獄から市場へと数名の男に引きずられて行かなければならず、しかも、1時間半ほど暴れた後でようやく執行された。最後にその不幸な女性の頭は編んだ自分の髪で高い柱に繋がれて、地面に固定された胴体から力ずくで引きちぎられた。

（ロンドンの新聞である）デイリー・テレグラフ（Daily Telegraph）は、同様の見

61) 原注 Id., p. 159.

62) 原注 John Macrae Moir, on Capital Punishment, p. 143.

世物を次のように伝える⁶³⁾。「今再び法をそのまま執行することが容認されて、惨めな女性が監獄から絞首台へ引きずり出され、彼女は、絞首刑執行人の助手が横棒の下の子に彼女を無理やり押し入れるまで、看守と争い、噛み付いて引っ掻いたり、叫んで蹴ったり、飛び付いたりして、絞首刑執行人は服の背中部分が半ば引きちぎられた状態で彼女をこの世から送り出した」。女性の執行に付き物であるこれらのうんざりするような出来事は、エクセター (Exeter) でのアッシュフォード (Ashford)、チェスター (Chester) でのホルト (Holt)、そしてブリストル (Bristol) でのサラ・トーマスの執行を特徴付けていた。

1863年6月⁶⁴⁾、アリス・ホルト (Alice Holt) は母を毒殺した罪で裁判にかけられた。被告人は妊娠していた。そのため、彼女の裁判は夏の巡回裁判から冬の巡回裁判に延期された。その間に、彼女は出産した。夏に裁判が開かれていれば、彼女の妊娠は執行の障害となることを認められていただろう。しかし、裁判が延期されたために、その支障は取り除かれてアリス・ホルトは絞首された。絞首台での光景は通常よりも悲惨なものだった。みじめな女性は、ボルトに何らかの不具合があったため、弱々しく怯えながら踏み板が落ちるのを何分間も待たされた。その間、彼女は絞首刑執行人に「早くして」と叫び、不快な見世物を見るためにやって来た群衆の哀れみと同情を掻き立てた。

モワール⁶⁵⁾ は説得力のある示唆をしている。妊娠した女性が死刑判決を受けた際に発生する特殊な状況に注意が払われなければならない。この場合、法は執行を先延ばしするよう命じている。立法者は母親の長引く苦痛が不幸な子どもにどんな影響を与えているか適切に斟酌したのだろうか。

死刑事件において、妊娠しているか否か決定することの困難と不確実性は、有罪の評決がなされた後で死刑判決を宣告されたマリー・ライト (Mary Wright)⁶⁶⁾ の事案によって例証されている。

シドニー・テイラー (Sidney Taylor) 氏は、犯罪者の妊娠を理由として執行の延期を提案し、裁判所は陪審名簿に載せられた既婚女性の陪審員にその主張を審理するよう命じた。既婚女性の陪審員は判断として、「この犯罪者は心臓が拍動している子どもを妊娠しているとは認められない」と述べた。陪審の女性陪審長が判断を伝統的な形式の

63) 原注 Bovee, Christ and the Gallows, p. 213.

64) 原注 Dymond, Law on its Trial, p. 157.

65) 原注 Capital Punishment, p. 195.

66) 原注 Dymond's Law on its trial, p. 68.

言葉で述べると、慈悲深い弁護士の鋭敏な耳は、「心臓が拍動している」という単語が強調されていることを聞きとった。これは、彼にとって十分意味のあることだった。女性陪審員が判断を下した物言いから、彼は彼女らが妊娠自体を否定しようとしたのではなく、子どもの「心臓が拍動を始めている」ことを否定しようとしただけと考えると主張した。

これに対して、ボランド（Bolland）男爵は回答した。「私は法が私に権限を与えていることを全てやった。これ以上何ができるか分からない」。

テイラーは、以下のように述べた。「法律は、もし致命的な間違いがあるなら、たとえ殺人事件であっても、執行を猶予する裁量権を閣下に与えています。私は、万一、犯罪に対する刑罰の中で無実の命を区別できない危険性がわずかでもあるならば、その裁量に従って行動することの適切さを閣下の慈悲深い心に対してすぎるまでもないと確信しています。もっとも、知識のない女性よりも医師の意見に従って行動する方がより安全だとは思いますが。」

裁判官は返答した。「現時点では私はこれ以上何も行わない。しかし、私はこの件を熟考することとする」。

翌朝、博識な裁判官は、裁判官席からシドニー・テイラー氏に話しかけて、被告人マリー・ライトの事件における既婚女性の陪審員による事実認定についてテイラー氏がなした示唆を検討して、昨晚のうちにノリッジ（Norwich）の3人の著名な開業医に相談し、そのやりとりの結果、執行を延期することを決めたと告げた。

テイラー氏は、閣下がおっしゃっているのは執行をある特定の時点まで延期するということなのか、無期限に延期するものなのか尋ねた。それに対して、ボランド男爵は、「無期限である」と答えた。

次の巡回裁判が始まる少し前に年配の女性の判断が間違っていたことが完全に証明され、賢明な男爵の人道的な裁量権の行使の妥当性が確認された。というのは、マリー・ライトは子どもを産み、かくしてそのことを示したのであり、彼女の弁護人の人道的な介入のおかげで、ノリッジの人々の目の前で考え得る最も悲惨な出来事の1つが起っていたかもしれない。

もう1つの例⁶⁷⁾は前夫を殺害した罪で逮捕されて審理されたシャーロット・ハリス（Charlotte Harris）である。彼女は妊娠していると認められ、そのために執行を延期さ

67) 原注 Dymond, Law on its Trial, p. 157.

れた。しかし、胎児が産まれた後には判決を執行するという所作が行政官によって表明された。再び世論は法に反対してわき上がった。それは本質的に女性たちの問題であり、英国の女性たちの博愛精神が気の毒な女性の末路について何か月も収容し、その後に子どもを産んだ後になって子どもと彼女を引き離し、犬のように窒息死させることの残虐さに対して反発したのである。約4万人の女性が請願書によって女王に訴えた。ハリスは減刑され、それ以降、このような状況下で判決が言渡された女性は決して絞首されないという原則が確立した。

ハーキマー (Herkimer) 郡で1887年2月28日に執行されたロクサラナ・ドルーゼ (Roxalana Druse) の例は、あまりに最近で皆の記憶にもあまりにも生々しいため、その件に関してどのように意を尽くした言葉であっても正当化することはできない。州のあらゆる層から寄せられた彼女の執行に対する抗議や彼女の件に関係した世論の盛り上がりは、女性の絞首刑に反対する広く根深い思いの存在を示した。

現行方法の変更を助言する

第4 当委員会は、絞首による現行の死刑執行方法についての上述の批判に鑑みて、根本的な改革がなされるべき時が来たと確信している。結論に至るまでには、この問題についての長期にわたる徹底した調査を行っており、報道機関において一般に見受けられる意見は、過去いくらかの間、このような変更の妥当性を強く訴えてきたとは言え、正しい結果が導かれうるのは、それに加えて変更の理由や変更への反論が注意深く検討されてからでしかありえない。生命の剥奪は、それ自体、あらゆる人間が被る最も深刻な損失である。偶然であっても、死の苦痛を大きくしたり、法の執行をより恐ろしいものにするような方法でその損失を増大させたりすることは、抑止効果があるとの議論に基づいてのみ正当化される。既に示した通り、それは長年にわたって試みられてきたが成功していない。

残虐で尋常でない刑罰の憲法上の禁止

第5 当委員会は、「残虐で尋常でない刑罰」を科すことを禁じる本州の憲法1条5項⁶⁸⁾ に対して適正な注意を払ってきた。過去2世紀にわたってこの禁止が現れる様々

68) 訳注 ニューヨーク州憲法第1条5項「過大な保釈金が要求されてはならず、過大な罰金が科されてはならず、残虐かつ尋常でない刑罰が賦科されてはならず、証人は合理的な理由なく拘禁されてはならない。」

な制定法の形態の下で、このことは多くの司法判断の論点であった。

「憲法条項の適用範囲を正確に定義する努力には困難が伴う」とクリフォード（Clifford）判事は指摘した上で、「残虐で尋常でない刑罰は科されてはならないが、博識なる解説者（ブラックストン Blackstone）によって言及されたように拷問を与える刑罰や、同種の不必要な残虐性を有するその他のあらゆる刑罰が連邦憲法の修正条項によって禁止されていることは間違いなく認められる」と連邦最高裁の意見⁶⁹⁾を述べた。

しかし、当委員会は憲法によって禁止されるべき刑罰が尋常ではなくかつ残虐でなければならないことについては全く疑念を抱くものではない。残虐ではあるが尋常でないとは言えない刑罰は禁止されておらず、他方、尋常ではないが残虐ではない刑罰もまた同様である。確かに、ある意味において、絞首刑は残虐ではあるが尋常ではないとは言えず、他方、尋常ではないが残虐ではない執行方法は他にもある。

今日の人々は法の執行において復讐の精神の如きものには何であれ反対し、今日の執行方法が期待された結果を達成しているかもしれないが、それでもなお同時に、犯罪者に余分の激しい肉体的な苦痛を受けさせて死の恐怖を増大させることは、時代の博愛精神のみならず、法の内容自体にも違背している。

第6 当委員会は、あたかも生命の終焉が最終的に生じるまでに身体に対する長く続く拷問が科されることによって死の恐怖が高められるのと同様に、犯罪者が確実かつ有効な方法で死に追いやられる場合であっても、法の目的は十分に等しく達成されると確信している。

絞首刑に代わるものとしての電気椅子の提案及びそのための理由

（省略）

以上、謹んで提出申し上げます。

ELBRIDGE T. GERRY,

MATTEHW HALE,

ALFLED P. SOUTHWICK,

委員会

アルバニーにて、1888年1月17日付

69) 原注 Wilkerson v. Utah, 99 U. S., 135.

関法 第65巻 第3号

死刑の適切な賦科をもたらし、それに関連する法の現行規定を修正するための法律

上下両院によって代表されるニューヨーク州民は以下の条項を制定する。

(省略)

(了)